

今年の企画は現地スタッフが主役！ 東ティモールフェスタ2021

初のオンライン開催となった東ティモールフェスタ。ATJ/APLAは、東ティモールコーヒーを扱う団体と合同で、現地で働く東ティモール人スタッフにフォーカスした企画を実施し、現地パートナーのオルター・トレード・ティモール社(ATT)からルシオさんとペリーナさんに出演してもらいました。



ルシオさんは、摘んだコーヒーの実をそのまま仲買人に売っていた生産者たちに、加工方法や求められる品質基準を伝える難しさや、そのことを理解してもらえるまで向き合い続けていくのには忍耐力が必要と、産地担当ならではの苦勞を話してくれました。

会計担当のペリーナさんは、3人の子どものお母さんで、一緒に暮らす妹に子どもたちの世話を手伝ってもらいながら働いています。母として、ひとりの女性として働くなかで、家庭への責任と仕事の責任のどちらが優先とかではなくどちらも大事にしなければいけない、と語っていたのが印象的でした。

良い品質のコーヒーを日本に届けたいという強い思いを持って、それぞれの現場で民衆交易を支えているスタッフたちの頑張りを知ることができる貴重な時間となりました。

大久保ふみ(おおくぼ・ふみ/ATJ)



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia) フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ) パランゴンバナナやエコシユルプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから

特定非営利活動法人APLA

人から人へ PtoP ピープル NEWS vol.45 2021.08

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集

繰り返されるガザ地区への攻撃、その背景にあるパレスチナ問題とは



分離壁に描かれたアート



タヌキさんが制作した
産地紹介の動画は
YouTubeをご覧ください



動画はコチラ

若井俊宏(わかいいしひろ/ATJ)

どもは父方の苗字=タヌキさん=タヌキさん=を名乗るのが一般的ですが、結婚してもお母さんはタヌキのまま、だそうです。映像を作るのは、大学時代の友人からの影響とのこと。元々観るのは好きで、自分でもやってみようと思ったんです。独学で身に付けたそうです。今も、カカオキタで飲み物を作って提供する傍ら、ミュージックビデオ制作を請け負ったり自作作曲から手掛けたりしており、あるカクタンミュージシャンの楽曲をリズムクとしたコンスタントでは3位入賞(アジア最高位)という美力派。イラストも手掛けるなど、タヌキさん才能を発揮しています。もちろん本業にも余念がなく、カカオキタは上下関係なく家族の良いい職場だが、ちょっとリウツクアスすぎだとも思うと生真面目な一面も。カカオの風味がしつかり感じられるコアトリアンクは彼の自信作で、美味いと言ってもらえることが何よりの誇りです。と語ってくれました。

今後は、PtoPの新世代「チア」に力を入れた動画を作りたいと意気込むPtoPの奇才。さらなる活躍にご期待です。



トネシアは、パプア州、カカオキタ社(以下、カカオキタ)のカフェで働くタヌキさんは、ちょっと専断な23歳。パプア風味のイケメンです。今年2月、カカオ豆からチョコレートを作るイベントをオンライン中継した際、産地紹介の動画を作ってくれたのが彼でした。

トカゴミのように見えるくらいに程よく空撮されたPtoPの森がフェードインするオサシな始まりで掴みはオウター、こちらの要望も的確に盛り込んでくれたほか、時期が異なるために撮れない画については別の人が入るべく撮影した動画も快くなくて、一度しか現地を訪れたことのない私でも森の二オキが思い出せるような、PtoP奥満載の一本をさざらんと仕立て上げてくれたのです。

タヌキさんはパプア州西部のナレシ出身ですが、お母さんはカカオ産地であるラウツ村が地元で、彼も小さい頃からちよちよ遊びに行っていたそう。おじいさんの「サウク・サウク」さん(86歳)の畑は叔父さんが引き継ぎ、カカオキタにも出荷しているとのこと。彼自身はカカオ栽培に明るいわではないですが、そんな背景もあって、ラウツ村での撮影はとて楽しめたと言っていました(ちなみにPtoPは夫婦別姓文化のようで、子



自作のココアトリアンク

アラブ・タヌキ・サウク・サミュエル・ペンカタ(通称タヌ)さん from トネシア・パプア州

コアトリアンク開発から動画制作まで承ります



2021年5月10日、パレスチナ自治区ガザがイスラエル軍による空爆に見舞われた。21日、ガザ地区を実効支配するハマスとイスラエル政府の間で停戦合意が交わされたが、子ども66人を含む242人のガザ住民が犠牲となり、2000人近くが負傷したと国連人道問題調整事務所(OCHA)は発表している。ガザ地区では2008～09年、2014年とこれまでもイスラエル軍による大規模な軍事攻撃があり、多数の尊い人命が失われてきた。

パレスチナ問題の経緯

パレスチナ問題の発端は、19世紀末ロシアやヨーロッパ各地でユダヤ人が迫害されるなか、ユダヤ人国家建設を目指す「シオニズム」まで遡り、「土地なき民に民なき土地を」というスローガンの下、ユダヤ人のパレスチナ移住が始まった。しかし、そこは元々パレスチナ人が暮らしていた土地だ。

第一次世界大戦後、英国による委任統治が始まると、ユダヤ系移民は一気に増え、パレスチナ人との対立が激化した。英国の三枚舌外交(※)はその後のパレスチナ人とユダヤ系移民の対立に拍車をかけることになる。1947年に、パレスチナ問題は国連の手にゆだねられ、パレスチナの土地にアラブとユダヤの二つの国家を作るという「パレスチナ分割決議」が採択された。当時のパレスチナに新しく移住し、パレスチナの1割にも満たない土地に住んでいたユダヤ人が57%の土地を得るという内容で、アラブ人はこの分割案を拒否した。しかし、イスラエルは1948年に独立を宣言し、第1次中東戦争(1948～1949年)で圧倒的な軍事力に物を言わせてパレスチナの占領を拡大した。



パレスチナ領土の変遷

イスラエルによる占領政策

イスラエル建国の前後にかけて、約75万人のパレスチナ難民が生まれた。パレスチナ人の中では「ナクバ(大災厄)」と呼ばれ、土地を追われた多数のパレスチナ人は難民となってイスラエルや周辺諸国に流れ込んだ。その後難民は増え続け、70年以上が経った今日、500万人以上のパレスチナ難民は故郷に戻る事ができていない。

イスラエルは1967年、第3次中東戦争により、さらにヨルダン川西岸地区やガザ地区を軍事占領した。国連安保理はイスラエル軍の撤退を求めたが、イスラエルはこれに応じず、1970年代以降、パレスチナの土地への入植を拡大し、パレスチナ人の土地は虫食い状態となり、さらに2002年からは

入植地を守るという名目で分離壁の建設を開始、西岸地区とイスラエルの境界であるグリーンライン(1949年の停戦ライン)を超えてパレスチナ側に深く入り込み、人びとが自由に移動できないなど日常生活に大きな影響が出ている。



ガザ地区での緊急救援活動
オリーブの出荷団体が
食料や寝具を配布

「エルサレム問題」とは

エルサレムには、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3宗教の聖地がある。1947年の国連のパレスチナ分割決議ではエルサレムを国連の永久信託統治区とした。1948年にイスラエル建国が宣言され、第1次中東戦争後の停戦でエルサレムは分断され、西エルサレムをイスラエルが、東エルサレムはヨルダンが統治することになった。ヨルダンは、当時イスラエルによってパレスチナ人村落から追われた多くの難民たちを「東エルサレム住民」として受け入れた。

1967年、第3次中東戦争後にイスラエルは占領を拡大。一方的に停戦ラインを変更し、エルサレム旧市街を含む東エルサレムを占領する。1980年に一方的に併合し、エルサレムを「永遠の首都」として宣言した。ただし、欧州諸国や日本を含む国連加盟国のほとんどがイスラエルによる東エルサレム

の併合を承認していない。

イスラエルによる分離壁建設によってパレスチナ自治区から切り離された東エルサレムに住むパレスチナ人は、イスラエル側からも排除され閉塞状態に置かれてきたが、今回さらに、東エルサレムのシエイク・ジャラ地区のパレスチナ人169人(ナクバで家を失い、難民となった家族)をイスラエル入植者が実力行使で立ち退かせようとする暴挙が発生した。それに対するパレスチナ人の抗議活動はイスラム教の聖地、アルアクサ・モスクにおけるイスラエル治安部隊との衝突に発展し、それが引き金となって、今回のハマスによるロケット弾の発射とイスラエル軍によるガザ地区への空爆に至った。

今回のガザ攻撃について、停戦合意は結ばれたものの、根本的な問題の解決は何一つなされていないのだ。

※ 第一次世界大戦において、オスマン帝国と戦った英国は、シオニストを支援すれば欧米在住のユダヤ人から協力を得ることができると考え、「パレスチナにユダヤ人国家建設を支持する」という書簡を送り(バルフォア宣言)、一方でオスマン帝国からの独立を目指していたアラブ人に対して、「アラブの独立支持を約束する」というバルフォア宣言とは矛盾する書簡を送っている(「フセイン・マクマホン協定」)。さらに同盟国であるフランスとは、戦争終結後はオスマン帝国の領土を分割するという協定(「サイクス・ピコ協定」)を結んだ。